

フルブライト上院議員の“春”

4年前に夫人を亡くされたフルブライト元上院議員が、ことしの3月10日めでたく再婚された。4月に85歳となった同議員は、ますます元気である。

新夫人は、この3年間、米国フルブライト協会(The U.S. Fulbright Association)の専務理事を務めていたMs. Harriet Mayor。同協会は、米国フルブライターのデータ収集というやっかいな仕事に取り組んでいる。

フルブライト氏の健在を報じたワシントン・ポスト紙によると、結婚式の2日後、同夫妻はワシントンの国立ケネディ・センターに飾られた同議員のブロンズ製胸像の除幕式に出席。その席上、同議員は「1957年だった。訪米したソ連のボリショイ・バレエ公演を見に、当時の駐米ソ連大使と一緒に市内の小さな映画劇場へ行った。その映画劇場のみずぼらしさには驚いた。そこで翌日、上院に、米国の首都に文化センターを設立する法案を提出したのである」と、当時の思い出を語った。

ケネディ・センターの生みの親である同議員は、同じような果敢さで、広島原爆投下のたった2週間後に、フルブライト奨学計画の最初の法案を提出したのである。

自分の胸像について、同議員は「不格好な私自身にくらべ、これは素晴らしい」と語ったと、ワシントン・ポスト紙は伝えている。

(建前と本音)

pening now in the highest government circles is a kind of “nemawashi,” consensus-building that could eventually have an enormous impact on Japanese and global environmental policy.

I think the realization is rapidly dawning that if, indeed, the world's environmental infrastructure is breaking down, the country with the money and the expertise to prevent such a collapse becomes, de facto, as powerful a nation as the world has ever seen.

Environmental expertise would actually replace military expertise as the greatest power at a nation's disposal. Instead of huge armies, a nation's environmental engineering corps—capable of stopping floods, turning deserts green—would place it at the apex of world leadership. At the Mitsubishi Research Institute, I have spoken with researchers who have thought through such scenarios in remarkable detail.

At the Environment Agency, on the other hand, I have spoken with men (where are the women in these bureaucracies?) who argue that such programs, if implemented, would cripple a nation's economy as surely as runaway military spending. They say that if the world comes to depend on such environmental engineering corps, it will probably have already deteriorated to a point where it is beyond saving at any price. Since technology has gotten us into this fix, why should it now be trusted to get us out of it?

I see and hear much debate of this sort going on in the corridors of power in Japan. I must admit, though, that I still don't feel expert enough in Japanese culture to know whether what I am hearing is “tatemaie” or “honneté”. I sincerely hope it is “honneté”.

恩返しビンゴ大会

—ミシガン大同窓会—

ミシガン大同窓会(斉藤とし子会長=70—74年)は、5月11日夜、東京有楽町の外人記者クラブで年に一度のビンゴ大会を開いた。シンガポール往復航空券、ワープロなど、同窓会員が集めてきた豪華商品が当たるので、毎年全員が心待ちにしているイベントである。

ことしも家族連れを含め、130人が集った。「ビンゴ!」の歓声とタメ息が交錯するなかで、300万円相当の山積の賞品が2時間ほどでなくなった。

ビンゴ大会はことして7回目。会員とその家族が交流を深めるだけでなく、お世話になったミシガン大学に、ささやかながら恩返ししようというのが、始まったきっかけだった。これまで既に5万ドルをミシガン大に送金しており、日本に留学するミシガン大学の大学院生の航空券購入費の一部に充てられている。これまで延べ11人がその対象になった。ことしも100万円近い純益があり、さっそくアナーバーに送られた。

なお、ミシガン大学同窓会には約800人の会員がいるが、うちフルブライト留学生は300人ぐらいである。

(佐々木謙一 1958~60年ミシガン大学ジャーナリズム学科)

(親孝行に感動)

that I had undervalued this activity in America. As always, I learned to look differently at my own society and ask, what is the difference in attitude toward volunteers in Japan and the U.S. and what does that say about the two societies?

I talked to a woman who was spending her days caring for her mother who had had a stroke. Her mother was deaf and her daughter quickly wrote everything down on a small white slate so we could have a very good conversation including her mother. The daughter had quit her job as an editor to take care of her mother. “Anyone can be an editor”, she said, “but only I can take care of my mother”. Gerontologists are always studying the “burden” of caregiving. This woman may be unusual but maybe not. In America, too, there are people like her. In Japan the role of housewife is certainly more valued than in the U.S. Is caregiving just taken for granted in Japan? Is it valued? Is it valued in the U.S.? These are the issues I will explore as I analyze the data I collected. I don't know the answers yet but I do know that my work here will be enhanced by the “new” eyes and ears I brought back from my life in Japan. And I cannot be appreciative enough to the Fulbright program for allowing that to happen.

編集後記 NEWSLETTER 第4号をお届けします。1987年6月の創刊号は、Vol. 1 No. 1となっており、以来Vol.とNo.の使い分けが混乱しておりましたが、ほぼ年1回発行のペースとなってきましたので、この際、分かり易い通しナンバーにさせていただきます。なお紙幅の都合で割愛した写真原稿がありました。乞御諒解。(功刀・近藤)

TOKYO GARIOA/FULBRIGHT ALUMNI ASSOCIATIONS

ガリオア・フルブライト東京同窓会



NEWSLETTER

No. 4

JUNE 1990

東欧の民主化で注目されるフルブライト計画

激動の東欧情勢と東欧諸国の民主化との関係で、フルブライト計画が注目されています。インタナショナル・ヘラルド・トリビューン(IHT)紙上に、「東欧圏の民主経済再建には、フルブライト計画型の人材育成が望ましい」という論文(元NATO経済担当官)が載り、それに賛成する投書が、フルブライターから寄せられたり、フルブライト氏自らが、6万人の米国人、11万人の外国人フルブライターが、世界の平和、相互理解のため大きな貢献をしているのに、米政府の予算が、5年間据え置き(実質的には縮小している)というのは憂慮に耐えないと、「フルブライト計画の堅持」をニューヨーク・タイムス紙上で訴えています。

東欧問題には控え目な日本も、「金は出すが口は出さぬ」式の教育援助を、各国に呼びかけるくらいの積極性が欲しいものです。

今回は、来日したフルブライター2人に、1年間の留学印象記を寄せてもらいました。

建前と本音

By Douglas C. McGill

In my Fulbright research I've been looking at Japanese environmental policy and environmental action—the difference between what is thought and what is actually done about environmental issues in Japan.

On the policy side, I've spent a lot of time interviewing government bureaucrats in Kasumigasaki. “Global environmental issues” are this year's hot topic in government circles. There are endless conferences on the subject. The Ministry of Foreign Affairs, MITI, the Environment Agency and other agencies have started special departments for “Global Environmental Affairs.” Keidanren and other business associations have done the same. The crying need for international collaboration on these questions is a key point in rhetoric emerging from all quarters.

But a nagging doubt persists about this sudden conversion to the green way of life. Where are the specific actions backing up claims of concern about global warming, deforestation, the ozone hole, species extinction, acid rain and the rest? In the absence of such action, all the talk has a slightly hollow ring.

Still, I think it's an open question whether this activity is serious or not. It seems to me quite possible that what's hap-

(4ページに続く)

Mr. Douglas C. McGillは1989年度三菱グループの冠奨学生。New York Timesの経済記者から応募、日本における環境問題とくに世界規模の環境破壊に対する日本の認識や対応をテーマに来日。

親孝行に感動

by Ruth Campbell

I am writing this three weeks after returning from Japan where I lived in Tokyo, from July, 1989 through April, 1990 as a Fulbright research fellow.

My research in Japan explored the relationship between older people and their children concerning caregiving. I was welcomed into many people's houses and was privileged to listen to people talk very openly about their fears of becoming a burden on their children, their feelings about living with or separately from their children, the problems and even pleasures of caring for an ill person. To me, the great opportunity Fulbright offers is the freedom to ask the questions I want, to explore my chosen area and to learn through my daily life, my professional and personal life, new ideas that challenge the way I previously looked at things.

For example, often when I spoke to groups in Japan about social welfare in the U.S. I was asked questions about volunteers. Japanese are quite enthusiastic about the American way of using volunteers. In the U.S., we are aware of all the problems recruiting volunteers now that so many women are working and don't have time to volunteer. As I listened to the Japanese questions, I realized

(4ページに続く)

Mrs. Ruth Campbell 1989年度のフルブライト留学生。ミシガン大学医療センターのソーシャルワーカー専門家で、日本の老人問題を研究、1990年5月末帰国。夫君(ミシガン大学政治学部準教授)も同時期フルブライターとして慶応大学に留学した。

充実する「冠奨学金」

1990年も19人に供与

「冠奨学金」の募金活動は、1989年度も活発に行われ、新たにトヨタ自動車、味の素が、いずれも年額500万円を今後4年間提供していただけることになったほか、従来の冠資金もほとんど継続していただけることになりました。金額にして1億円近い資金が、通常のフルブライト基金に上乗せして日米教育交流振興財団（フルブライト記念財団）から提供されることになりました。

この結果、1990年度には米国人17人、日本人2人の合計19人の冠奨学生が誕生しました。（IBM、YKK、高橋財団の資金は、選ばれた奨学生側の止むを得ない事情により欠員となり、来年度に回されることになりました。）

基金は、89年度までに総額8億6270万円余りとなり、90年度奨学生を含めると、米国人100人、日本人25人、合計125人の冠奨学生が生まれたこととなります。

昨年度来日した冠奨学生の何人かに会いましたが、一同このような奨学金によって来日出来たことを喜び、また冠提供会社より滞日中に受けた研究上の支援ならびにもてなしに対して、心から感謝しておりました。なお、90年度の募金状況につきましては、現在、4社に対して依頼を行っておりますが、近々吉報をお届け出来るものと期待しております。（小西 輝明）

日米相互理解に貢献を

1990～91年度東京同窓会会長

川村 茂 邦

先の総会で、またまた東京同窓会会長を仰せつかりました。早いもので、私が第4代会長をお引き受けして2年が過ぎました。会員の皆様の暖かいご支援に加え、同窓会組織の実質的な運営を分担願いました役員の皆様の常に前向きで献身的なご協力により、無事任期を終えることが出来ましたことを、心から御礼申し上げます。

私は会長をお引き受け致しました時、2つのことを提案ご協力をお願い致しました。一つは同窓会活動が活発に行われるための下地は「会員相互の日頃の連携と会員の増員」であり、もう一つは我々同窓会の力で一人でも多くのアメリカ人留学生を日本にお呼びしたい、その為に「企業へ募金活動の働きかけ」をすることでした。

東京地区フルブライター約3000名に対し同窓会費納入者数は、1987年度—1064名、1988年度—1189名、1989年度—1756名とふえ、同窓会活動を運営する我々にとっては心強い後ろだてをいただきました。

また、ホスピタリティ委員会の Welcoming Service は、初めて来日した留学生から感謝されています。



東京同窓会総会に招かれたアマコスト米大使（右）を出迎えた川村会長

フルブライト財団への奨学金の募集活動はこの2年間に目を見張る成果を得ることが出来ました。金額で見ますと3135万円（1987年度）、7850万円（1988年度）、8260万円（1989年度＝ほかに志野基金1億100万円）となりました。

今年は我々の生みの親であるフルブライトさんの来日が予定され、また2年後には40周年を迎えます。それぞれの細部については特別委員会にて検討を始めていますが、一段のご協力ならびに積極的なご参加を期待致します。

今日、日米間には構造協議を始めとして、解決しなくてはならない多くの問題があります。我々同窓会メンバーは日米両国を最も良く理解している国際人であると自負しています。

個々の持ち場・立場で、両国の相互理解を深めるために行動することが我々フルブライターに課せられた一つの使命でもあります。同窓会活動には自ずから限界がありますが、常にこの精神に則り行動出来ればと念じています。

東京同窓会、1990年度総会

ガリオア・フルブライト東京同窓会の本年度の総会は、4月23日午後6時から、東京丸の内日本工業倶楽部で開催されました。当日のゲスト・スピーカーは、マイケル・アマコスト駐日米国大使。

冒頭、挨拶に立った川村茂邦会長は、その中で、「大使がフルブライト交換学生としてドイツに留学した時のことでもあります。受け入れのドイツの大学は、大使の学業よりもバスケット選手としての天性を認め、大学のチームのメンバーに推したのです。そこで、大使はドイツ各地をバスケットで転戦、その大学のために非常に貢献を果たしたのであります。思うに、フルブライト・プログラムの長い歴史を通じて、スポーツでスカラシップを獲得した人は、空前絶後ではないでしょうか」と、エピソードを披露。

このあと、総会議事に入り、午後7時から懇親会に移り、同8時すぎまで歓談がつづきました。当日の参加者は、ゲスト15人、会員187人でした。（柴田 實）

最高裁判所見学

ホスピタリティ委員会主催の最高裁判所見学は、アメリカン・グランティとその家族13人、同窓会員、日米教育委員会の委員と事務局員など合計28人が参加して、今年も5月8日に行われました。

午後1時半、まず、東京同窓会のメンバーである藤島昭最高裁判事を表敬訪問。日米の裁判制度の説明ビデオ（英語）を30分見たあと、後藤博判事との英語による質疑応答が行なわれました。

アメリカン・グランティからは、判事の人選、任命の方法や、最高裁判事の国民審査制度などについて鋭い質問が飛び、活発な論議が展開されました。

（文化活動小委員会委員長 三上紀史）

1990～91年度役員名簿

名誉会長 小山 八郎、河村 欣二
 会長 川村 茂邦
 副会長 渡辺 宏（会長代理）、平野 龍一、功刀 照夫、佐藤ギン子、田中 哲男、安 威子
 監査役 堀 憲明

担当副会長
 Foundation Liaison 委員長 小西 輝明 渡辺 宏
 Alumni Meetings 委員長 柴田 實 安 威子
 副委員長 岩男寿美子
 Hospitality 委員長 高澤 廣茂 田中 哲男
 副委員長 久世 篤
 Publicity 委員長 近藤 健 功刀 照夫
 Administration 委員長 (渡辺 宏) 渡辺 宏
 事務局長 池田 政利

1990 FULBRIGHT FOUNDATION GRANTEE LIST (19)

Name	Discipline/Topic	Grant
I. PROFESSIONAL RESEARCH SCHOLARS (10)		
Mr. CRUMPLEY, Charles R.	Japanese Banks: The New Era of Financial Exports	Fuji Bank
Dr. FRUIN, W. Mark	Japanese Development Factory: Organizational Function	Industrial Bank of Japan
Dr. GOLANY, Gideon S.	Modern Japanese Below-ground Shopping Centers	Mitsubishi Group
Dr. JOHNSON, Elmer H.	Japan's Correction/Rehabilitation Agencies	Shino Fund
Dr. KEYS, Paul R.	Japanese Management Applications to U.S. Human Services	Nissan Motor
Dr. MURPHY-SHIGEMATSU, Stephen	Okinawan Youth: Ethnic Identity and Attitudes	Ajinomoto
Ms. SUN, Marjorie E.	Japan's Rock Gardens and Rainforests	Johnson Wax
Mr. THRASHER, William T.	American Shaker and Japanese Folk Artsanry	Mitsui Group
Mr. VOORHEES, A. Scott	Japanese Air Pollution Regulation Analysis	Toyota Motor
Ms. WRIGHT, Rosemary	U.S.-Japan Creative Process: I-Self and We-Self	Dainippon Ink & Chemicals
II. GRADUATE RESEARCH FELLOWS (5)		
Mr. ANDERSON, Michael D.	Kigumi: Japanese House Framing	Japan Economic Foundation
Mr. FOURAKER, Lawrence A.	Nouveau Rich Businessmen: Kaneko and Kuhara	Japan Economic Foundation
Ms. MEZUR, Katherine M.	Japan's in Kabuki and Butoh	Japan Economic Foundation
Mr. PURRINGTON, Courtney A.	Japan's Relation with Soviet Union and U.S., 1968~89	Sumitomo Group
Mr. SPENCER, Steven A.	Japan's Legal Barriers to Foreign Financial Services	Japan Economic Foundation
III. SITE-SPECIFIC GRADUATE FELLOWS (2)		
Ms. JENSEN, Kirsten K.	Date Family's Christianity in Sendai (17th century)	Tohoku G/F Alumni Assn
Mr. KENNEDY, Mark W.	Modern Japan Population Trends Dynamics since Meiji Era	Kyushu G/F Alumni Assn
IV. JAPANESE GRADUATE STUDENTS (2)		
Ms. MATSUYAMA, Akiko	U.S. Community Public Health Development/Organization	Mobil Oil
Mr. SAIKI, Jun	Psychological Mechanism: Hypothetical Situation Model	YKK